

## 親の被養育体験を媒介とした、養育態度の世代間伝達に関する検討

— 児童とその親の認知を通して —

橋 浩 太

### I. 問題と目的

養育態度の規定因として、親の生育歴を重視する立場に立つと、関係性の特質が1つの世代から次世代へと受け継がれていくという世代間伝達の視点が不可欠であると考えられる。世代間伝達のメカニズムに関しては、精神分析理論や行動レベルの社会的学習理論からの説明がなされてきた。だがこれでは説明不十分とする立場から、表象モデルの考え方が提出された。つまり、Bowlbyに始まるInternal Working Models (以下IWM)の枠組みである。ここでは、人の内部に愛着対象及び自己に関する心的表象(IWM)が形成され、それが愛着に関する情報を統合し、さらに注意、記憶、感情、行動等の体制化を進行させる個人特有の心的枠組みとして重要な役割を果たすと考えられている。

このような枠組みでの研究において、親のもつ愛着表象と子どもの愛着行動との間に特異的な関連性が見出されてきたことは確かである。また近年、伝達の不連続性(被養育体験の内容に沿わない養育行動を施し得るということ)や、愛着に関するメタ認知や内省能力といった伝達の媒介要因を扱っている実証的研究もみられるが、伝達のメカニズムについては十分に明らかにされてきたとはいえない(遠藤,1992)。

そこで本研究では、養育態度の世代間伝達のメカニズムを探るための第一歩として、親の被養育体験の詳細について探索し、それが養育態度の世代間伝達とどのように関連しているかについて検討することを目的とする。具体的には、第一世代(祖父母世代;以下G1)から第二世代(親世代;以下G2)への養育態度と、G2から第三世代(子ども世代;以下G3)への養育態度の対応性を養育態度の世代間伝達のパターンとし、これとG2の被養育体験との関連について検討する。

### II. 研究1

**【目的】**G2を対象に自由記述式の調査を行い、主に①自身の被養育体験、②その体験をどう処理し現在の養育に繋げているか、③現在のG3への養育に関して情報を得る。そこから得られた質的データの分析を通して、G2の被養育体験の処理過程を記述し、さらに養育態度の世代間伝達に関わる媒介要因についても探索する。

**【方法】**調査対象：小学校1～6年生の子どもを持つ親

116名(母親106名,父親10名;平均年齢37.34歳(SD=4.29))。

**質問紙の内容:**自由記述部分①父親と母親から受けた養育の全体的特徴及びそこで感じた感情②両親から受けた養育に対するイメージ(父母ごとに)③現在子どもにしている養育の全体的特徴(第一子,第二子ごとに)④自分の親から受けた養育が、現在の子どもの養育にどのように影響しているか⑤(自分の受けた養育について、これまでふり返ったことがあると答えた人に対して)自分が受けた養育を基に、どのように現在の子どもの養育を行っているか。

**手続き:**子どもを介して質問紙を家庭に配布し、記入後学校で回収。

**【結果と考察】**G2の被養育体験の処理過程に存在する段階については、①G1の養育に対する評価段階(養育の側面の評価・養育に対する感情的評価・養育の価値の評価から成る)、②方針の形成段階が見出された。評価的な段階や感情的評価が含まれていることは、Main, Kaplan, & Cassidy (1985)やBretherton (1985)が述べるIWMの機能の一部と共通している。さらにG3への養育行動が起こされた後に、実際の行動の評価段階が存在し、この段階は方針の形成段階と循環的な関係性にあることが示唆された。また、G2が被養育体験を処理しG3への養育行動を起こす過程で、意識的な方針と行動がくい違う(意識している通りにならない)ことについて悩んでいる者が少なからず存在することが明らかとなった。このことから、意識的な方針と行動のくい違いに着目することは重要な視点であると考えられた。伝達の媒介要因の探索に関しては、被養育体験の処理過程を通し、G2がG1から受けた養育及び現在自身が行っている養育に関して「ふり返っている」「向き合っている」ということが特徴的であった。このことから、G2の被養育体験を介した養育態度の世代間伝達における媒介要因として、Fonagy, Steele, Steele, Moran, & Higgitt (1991)やMain (1991)が指摘するような、内省力が重要ではないかと仮定した。

### III. 研究2

**【目的】**研究1で見出した被養育体験の処理過程の各段階、及び養育態度の世代間伝達に関わる媒介要因として

の内省力といった諸変数と、養育態度の世代間伝達のパターンとの関連について、G2とG3を対象に質問紙調査を行い、数量的な分析を通して検討する。

【方法】調査対象：小学校5・6年に在籍する児童487名（男児252名，女児235名；5年生200名，6年生287名；平均年齢11.30歳（ $SD=0.66$ ））と，その親433名（母親394名，父親35名，祖母3名，不明1名；平均年齢40.31歳（ $SD=4.92$ ））。

質問紙の内容：＜親用質問紙＞1) 養育態度の評定①自身の養育態度24項目〔辻岡・小高（1992）から選定した4下位尺度（情緒的支持；感情的統制；放任；同一化）6項目ずつ。4段階評定〕②自身の親の養育態度24項目〔①の文末の言い回しを「～だった」に変えたもの。4段階評定〕自身の親のうち，自分にとって影響の大きかった方を選択してもらい，その親の自分に対する養育態度に関して評定を求めた。※①と②の呈示順序については，順序効果を防ぐためにカウンターバランスした。2) 被養育体験の処理過程 a. G1の養育態度の評価①感情的評価②満足度③価値の評価④影響の評価⑤基にしている度合い〔1項目ずつ5段階評定〕，b. 養育方針の形成と実際の行動の評価①養育方針〔（自身の親と）1. 同じよう2. 違うよう3. 意識なしから1つ選択〕②実際の行動の評価〔1. 方針の通りになっている2. 方針の通りになっていない3. 分からないから1つ選択〕，c. G1と現在の自身の養育のふり返り〔独自に作成した，G1の養育のふり返り4項目と現在の自身の養育のふり返り4項目。4段階評定〕，d. 私的自己意識〔黒沢（1992）から選定した8項目。5段階評定〕※回答は質問紙を持ち帰った子どもと過ごす時間が長い方の親に要請した。＜子ども用質問紙＞親の自分への養育態度24項目〔親用質問紙と同内容の項目の言い回しを小学校高学年生が理解可能な言い回しに変えたもの。4段階評定〕※家庭で自分と過ごす時間が長い方の親について評定を求めた。

手続き：子どもに対する調査は各学級ごとに一斉実施形式で行った。親に対する調査は，子どもを介して質問紙を家庭に配布し，記入後学校で回収した。

#### 【結果と考察】

1) G2の被養育体験の処理過程諸要因同士の関係について：G2のG1の養育に対する評価と養育方針との関連については，評価がポジティブであればG1と同じようにし，ネガティブであれば違うようにするという傾向が顕著であった。また，私的自己意識が高いこと，及び日頃G1と自身の養育についてふり返ることの度合いが高いことは，養育方針があるか否かということと有意な関連性があることが明らかとなった。

2) 養育態度の世代間伝達とG2の被養育体験の処理過程諸要因との関連について：G2の認知したG1の養育態度の各側面の評価，及びG2・G3の認知したG2の養育態度の各側面の評価と，G2のG1の養育に対する評価との関連についての分析から，養育態度の各側面における世代間伝達について以下のことが明らかになった。情緒的支持においては，G1が情緒的により支持的であれば，G2はG1の養育をよりポジティブに評価し，それを基にしてG3に対しても情緒的により支持的になる傾向があるという，連続的な世代間伝達の法則性が認められた。感情的統制においては，G1の養育が感情的により統制的であれば，G2の評価はよりネガティブになり，基にする度合いもより低くなるが，G3への養育態度との繋がりは認められなかった。つまり，評価・方針の段階とG3への行動との段階に断絶があるということが示唆された。また，G2の養育方針ごとの養育態度の世代間伝達のパターンと，養育態度の各側面ごとの意識（方針）と行動のくい違いについては以下のことが明らかになった。情緒的支持においては，同じようにしようと思っている群では連続的な伝達が成功し，違うようにしようと思っている群では不連続的な伝達が成功しており，意識と行動が一致している。これに対し，感情的統制においては，同じようにしようと思っている群では連続的な伝達が失敗し，違うようにしようと思っている群では不連続的な伝達が失敗し，意識と行動に乖離が認められた。

#### IV. 総合的考察

本研究では，養育態度の世代間伝達のメカニズムについて踏み込むために，G2の被養育体験の処理過程という内的過程に焦点を当て，見出された諸要因と養育態度の世代間伝達との関連について，実証的な検討を行った点に意義があると思われる。主な知見として，G2の被養育体験におけるG1の養育に対する評価とそれに基づく意識的な方針の形成には意味ある繋がりがあっても，意識的な方針と実際の行動とは，行動の側面によって，一致したりくい違ったりすることが明らかとなった。今後，新たに提起された「統制的な側面においてはなぜ意図的な伝達が困難なのか」という問いを考究することや，養育態度の規定因として，親の生育歴以外に，Belsky（1984）やMeyer（1988）の挙げる，子どもの特徴，社会文脈的要因などを組み入れた，養育態度の世代間伝達のモデルについて実証的に検討していくことが課題となる。